

家庭の経済階層が生徒の 学習意欲・進路選択に与える影響

—— 専門学科と普通科の比較からみえてくるもの ——

佐藤 昭宏 (Benesse 教育研究開発センター研究員)

◇要約

- ◎専門学科においては、家庭の経済階層が高いほど、中2時点の成績や中3時点の高校教育に対するレリバンス意識が高くなる。一方、普通科においては、家庭の経済階層による成績やレリバンス意識の差はみられない。
- ◎専門学科の家庭の経済階層下位において学習意欲が加熱される傾向が確認された。なおこの傾向は現在（高2時点）の成績を統制しても変化しなかった。
- ◎専門学科においては、同レベルの成績層であっても、家庭の経済階層によって進路希望先に違いがあることが明らかになった。専門学科では、家庭の経済階層によって生徒の進路選択が制約されている可能性がある。

1 問題設定

本稿は、専門学科における生徒の学習意欲・進路選択と家庭の経済階層の関連を把握し、また普通科との比較を通してその特徴を明らかにするものである。

生徒の成績に階層間格差が存在することは、これまでに数多くの研究者が指摘してきた。そしてこの階層間格差は、社会的公正や機会平等の観点から、とりわけ教育社会学の分野において問題視され続けてきた。しかしながらこれだけ長い間、中心的なテーマとして成績と階層の関係性が取り扱われてきたにもかかわらず、階層が成績に与える影響をいかに断ち切るか、または格差を緩和するためにどのような方法をとるべきか、といった点については有効な対策が提示されずにきた。その背景には、どのように階層が成績に影響を与えているのか、そのメカニズムが必ずし

も明確に示されてこなかったことがあるように思われる。

そのようななか、近年明らかにされてきたのが、努力や学習意欲を媒介とした格差拡大という実態である。荻谷（2001）、荻谷・志水（2004）、耳塚ほか（2002）は、学力の階層間格差が生徒の学習時間や学習意欲を媒介に拡大していることを明らかにした。また荒牧（2002）は、階層が学習意欲や進路選択に与える影響を分析しており、階層の影響が高校ランクを媒介にした間接的なものであることを明らかにした。

しかしながら、専門学科には、荻谷や耳塚、荒牧らが対象としてきた普通科とは異なる、専門学科特有のカリキュラムや授業方法、学校文化がある。また在籍する生徒の卒業後の進路選択もかなり多岐にわたっている。

荒牧が目した高校ランクに基づくならば、今回の調査対象校である専門高校は普通

科進路多様校とほぼ同様のランクに位置づけられるが、階層が学習意欲・進路選択に与える影響は、先述した違いをもつ専門学科においても普通科と同様の傾向が確認されるのであろうか。

専門学科においては、従来就職を見据えた職業教育中心のカリキュラムが組まれてきたが、近年は大学進学を希望する生徒の増加から進学を目指したカリキュラムが組まれるなど変化がみられる。

今回の調査対象である都立専門高校においては2002年以降、積極的な改革が推し進められており、2005年には新たに「新しいタイプの高校における成果検証検討委員会」が発足し、「進学指導重点校」や「エンカレッジスクール」など、高校入学前の生徒の成績や本人の将来の進路に基づいた既存の高校枠の再編などが行われている¹（東京都教育委員会2002b）。これらの改革は、近年の保護者や生徒、産業界のニーズの多様化への対応策としては一定の効果が期待できるが、しかし視点を変えれば、こうした高校入学前段階における成績や進路希望を基準とした再編が、生徒の早期選抜につながる可能性も考えられる。

中学校段階までの成績や意識、将来展望が家庭の経済階層や資本の影響を受けやすいこと、そして選抜が「入試という一時点だけではなく、志願の段階で既に行われている」（飯田 2007）可能性を考慮すると、選抜が早期化すればするほど、生徒の将来展望や進路が家庭の経済階層によって固定化されるような事態を招くことになるのではないか。したがって、現行の専門学科の再編が過度な生徒の早期選抜・集中・選択の契機とならないよう、生徒の成績と意識・行動の実態を実証データに基づいて定期的に評価、反省していくことの意義は小さくないと考える。

以上の問題関心から、本稿では専門学科における家庭の経済階層と学習意欲・進路選択に着目し、実態把握を行う。そしてその結果に対して考察を加えることを目的とする。

なお、本稿の分析では専門学科と普通科の

比較を行っているが、今回のサンプルにおける普通科は専門学科と入試難易度が大きく変わらない普通科進路多様校であり、いわゆる普通科進学校は含まれていない。

2 仮説

次に本稿における仮説の設定を行う。前節で示した問題関心や先行研究を踏まえると、生徒の生まれた家庭の社会経済的条件によって、高校入学前の意識からその後の学校生活、卒業後の進路選択までもが規定されることが推察される。そこで本稿では5つの仮説を設定し、高校入学前、現在、高校卒業後のそれぞれの段階において家庭の経済階層が学習や進路形成に与える影響を検証していく。仮説は以下の通りである。

高校入学前

仮説1：学科によらず、経済階層が高いほど、中2時点での成績が高い。

仮説2：学科によらず、経済階層が高いほど、中3時点での教育のレリバンス意識が高い。

現在

仮説3：学科によらず、経済階層が高いほど、学習意欲が高い。またその傾向は成績を統制しても変化しない。

高校卒業後

仮説4：学科によらず、経済階層が高いほど、大学進学を希望する比率が高く、就職を希望する比率が低い。

仮説5：専門学科においては、成績によらず、経済階層が高いほど、大学進学を希望する比率が高く、就職を希望する比率が低い。

3 変数の設定

分析に使用した主な変数は以下の通り。

・Q1B——学科（2分類）

「工業科」「商業科」「農業科」を「専門

学科」に、「普通科」はそのまま「普通科」として使用した。

・ Q56—— 家庭の経済階層変数（3分類）²

家庭の各所有物（「テレビ」を除く）の変数を標準化して加算し、できるだけ均等に3分割したものを家庭の経済階層変数とした。なお、算出にあたってはウェイト2を使用している。加算した変数は以下の通り。

「ゴルフセット」「望遠鏡または顕微鏡」「ピアノ」「美術品・骨董品」「パソコン」「ファックス」「自分専用の部屋」「食器洗い機」「温水洗浄便座」の9項目である。

・ Q24—— 中2時校内成績

「下のほう」「中の下」を「下位」、「中くらい」を「中位」、「中の上」「上のほう」を「上位」とし3分割して使用。

・ Q26C——（中3時点）高校教育に対するレリバンス意識

「高校で学ぶ内容は自分の将来に役立つものだろうと思っていた」の項目で、「とてもあてはまる」「まああてはまる」を「あてはまる」、「あまりあてはまらない」「まったくあてはまらない」を「あてはまらない」に2分割して使用。

・ Q9A—— 学習意欲

「学校での勉強に積極的に取り組んでいる」

の項目で、「とてもあてはまる」「まああてはまる」を「あてはまる」、「あまりあてはまらない」「まったくあてはまらない」を「あてはまらない」に2分割して使用。

・ Q11B—— 高2時校内成績

「下のほう」「中の下」を「下位」、「中くらい」を「中位」、「中の上」「上のほう」を「上位」とし3分割して使用。

・ Q46—— 卒業後進路希望

「四年制大学に進学する」と「短大に進学する」を「四大・短大へ進学」に、「専門学校に進学する」「就職する」「考えてはいるが、まだ決まっていない」はそのまま使用し、4分割した。なお「家業の手伝いをする」「パート・アルバイトをする」「考えたことがない」についてはサンプル数が少ないため、分析から除外した。

4 分析

4.1 高校入学前の意識と家庭の経済階層

仮説1：学科によらず、経済階層が高いほど、中2時点での成績が高い。

仮説2：学科によらず、経済階層が高いほど、中3時点での教育のレリバンス意識が高い。

表1 「中2時校内成績」×「家庭の経済階層」×「学科」

学科 (2分類)	家庭の 経済階層	中2時校内成績			Q24×Q56×Q1B	
		上位	中位	下位	合計	N
専門学科	上位 (%)	16.3	32.4	51.3	100.0	(552)
	中位 (%)	10.8	33.0	56.1	100.0	(675)
	下位 (%)	9.6	27.6	62.7	100.0	(767)
	合計 (%)	11.9	30.8	57.3	100.0	(1,994)
ガンマ係数：0.151					0.1%水準で有意	p=0.000
普通科	上位 (%)	11.6	33.1	55.2	100.0	(181)
	中位 (%)	17.7	36.0	46.3	100.0	(175)
	下位 (%)	11.0	34.5	54.5	100.0	(145)
	合計 (%)	13.6	34.5	51.9	100.0	(501)
ガンマ係数：-0.017					有意差なし	p=0.261

まず、本項では、高校入学前の生徒の行動や意識と家庭の経済階層との関係のみをみる。表1は独立変数に家庭の経済階層を、従属変数に中2時点の校内成績を、統制変数に学科を投入した3重クロス表である。

専門学科では、経済階層と中2時点での成績の間に有意な関連がみられた。階層上位で校内成績上位の者が16.3%、成績中位の者が32.4%、成績下位の者が51.3%である。また階層中位においては成績上位の者が10.8%、成績中位の者が33.0%、成績下位の者が56.1%となっており、階層下位では成績上位の者が9.6%、成績中位の者が27.6%、成績下位の者が62.7%であった。以上の結果、階層が高いほど成績上位の比率は、階層上位>階層中位>階層下位と高くなる傾向が確認され、これらの差は0.1%水準で有意であった。また家庭の経済階層と中2時成績の関連の強さを示すガンマ係数は0.151であった。

次に普通科をみる。階層上位では成績上位の者は11.6%、成績中位の者は33.1%、成績下位の者は55.2%となっている。また階層中位では成績上位の者が17.7%、中位の者が36.0%、成績下位の者が46.3%、階層下位では成績上位の者は11.0%、成績中位の者は34.5%、成績下位の者は54.5%となっている。

ただしこれらの間に有意差は確認されず、経済階層が高いほど、成績上位者の比率が高くなる傾向は確認されなかった。

以上の結果から、専門学科においてのみ経済階層が上昇するにつれて成績上位の比率が高くなることが明らかになり、仮説1は専門学科においてのみ支持された。

次に高校入学前の教育に対するレリバンス意識と家庭の経済階層の関係をみていく。表2は独立変数に経済階層を、従属変数に中3時点における教育のレリバンス意識を、統制変数に学科をとった3重クロス表である。

まず専門学科では、階層上位でレリバンス意識の高い者が65.8%、レリバンス意識の低い者が34.2%であるのに対し、階層中位ではレリバンス意識の高い者が64.3%、レリバンス意識の低い者が35.7%となっている。そして最後に階層下位であるが、レリバンス意識の高い者が59.7%、レリバンス意識の低い者が40.3%となっており、経済階層が高くなるほどレリバンス意識が高くなる傾向が確認された。ただし10%水準の有意差でありガンマ係数も0.090と小さい。よって、階層とレリバンス意識の間には正の相関があるものの、その関連は非常に弱いものであるといえる。

つづいて普通科であるが、階層上位でレリ

表2 「(中3時点) 高校教育に対するレリバンス意識」×「家庭の経済階層」×「学科」

		Q26C × Q56 × Q1B			
学科 (2分類)	家庭の 経済階層	(中3時点)高校教育に対するレリバンス意識		合計	N
		あてはまる	あてはまらない		
専門学科	上位 (%)	65.8	34.2	100.0	(552)
	中位 (%)	64.3	35.7	100.0	(675)
	下位 (%)	59.7	40.3	100.0	(767)
	合計 (%)	63.0	37.0	100.0	(1,994)
		ガンマ係数：0.090		10%水準で有意	p=0.053
普通科	上位 (%)	39.2	60.8	100.0	(181)
	中位 (%)	39.7	60.3	100.0	(175)
	下位 (%)	44.2	55.8	100.0	(145)
	合計 (%)	40.8	59.2	100.0	(501)
		ガンマ係数：-0.065		有意差なし	p=0.609

バンス意識の高い者が39.2%、レリバンス意識の低い者は60.8%、階層中位では、レリバンス意識の高い者が39.7%、レリバンス意識の低い者は60.3%、階層下位でレリバンス意識の高い者が44.2%、レリバンス意識の低い者が55.8%となっており、階層が低くなるにつれてレリバンス意識が高くなる傾向が確認された。しかしながら、これらの間に有意な差は確認されなかった。また、全体的な傾向として、普通科内部では有意差が確認されなかったものの、専門学科と普通科を比較すると、平均で20ポイント以上レリバンス意識の数値に差がある点は注意しておく必要があるだろう。

以上の結果から、専門学科においてのみ、階層が高いほど高校入学前の段階での高校教育に対するレリバンス意識が高くなっていることが示され、仮説2も専門学科においてのみ支持された。

4.2 現在の意識や行動と家庭の経済階層

仮説3：学科によらず、経済階層が高いほど、学習意欲が高い。またその傾向は成績を統制しても変化しない。

本項では、現在の生徒の行動や意識と家

庭の経済階層の関連についてみていく。

表3は独立変数に家庭の経済階層、従属変数に生徒の学習意欲、統制変数に学科を投入した3重クロス表である。

まず専門学科をみてみると、経済階層上位では学習意欲の高い者の比率が56.9%、階層中位では51.3%と比率が低下しているが、階層下位では57.0%と3階層間でもっとも高い比率を示している。一方、普通科においては、学習意欲が高い者の比率は、階層上位では55.6%、階層中位では43.7%、階層下位では47.3%であった。以上の結果から、両学科とも階層中位で学習意欲がもっとも低くなっているが、その一方で普通科では階層上位において、専門学科では階層下位においてもっとも学習意欲が加熱されていることがわかった。この専門学科の階層下位における学習意欲の加熱は、従来の階層による意欲格差の実態とは異なる傾向を示すものであるが、学習意欲には成績が影響している可能性が高い。

そこで学科ごとに、成績を統制したうえで、経済階層と学習意欲の関係をみた。それが**表4**、**表5**である。

表4は普通科を対象としたクロス表であるが、成績上位においてのみ経済階層と学習意欲の間に弱い正の相関が確認された。具体的

表3 「学習意欲」×「家庭の経済階層」×「学科」

		Q9A × Q56 × Q1B			
学科 (2分類)	家庭の 経済階層	学習意欲		合計	N
		あてはまる	あてはまらない		
専門学科	上位 (%)	56.9	43.1	100.0	(555)
	中位 (%)	51.3	48.7	100.0	(675)
	下位 (%)	57.0	43.0	100.0	(763)
	合計 (%)	55.0	45.0	100.0	(1,993)
		ガンマ係数：-0.013		10%水準で有意	p=0.052
普通科	上位 (%)	55.6	44.4	100.0	(180)
	中位 (%)	43.7	56.3	100.0	(174)
	下位 (%)	47.3	52.7	100.0	(146)
	合計 (%)	49.0	51.0	100.0	(500)
		ガンマ係数：0.120		10%水準で有意	p=0.073

表4 「学習意欲」×「家庭の経済階層」×「高2時校内成績」

分析対象は普通科の生徒 Q9A×Q56×Q11B

高2時 校内成績	家庭の 経済階層	学習意欲		合計	N
		あてはまる	あてはまらない		
上位	上位 (%)	85.0	15.0	100.0	(40)
	中位 (%)	60.6	39.4	100.0	(33)
	下位 (%)	71.4	28.6	100.0	(28)
	合計 (%)	73.3	26.7	100.0	(101)
ガンマ係数：0.272 10%水準で有意 p=0.062					
中位	上位 (%)	69.2	30.8	100.0	(52)
	中位 (%)	52.7	47.3	100.0	(55)
	下位 (%)	56.1	43.9	100.0	(41)
	合計 (%)	59.5	40.5	100.0	(148)
ガンマ係数：0.191 有意差なし p=0.193					
下位	上位 (%)	33.3	66.7	100.0	(87)
	中位 (%)	30.6	69.4	100.0	(85)
	下位 (%)	32.9	67.1	100.0	(76)
	合計 (%)	32.3	67.7	100.0	(248)
ガンマ係数：0.009 有意差なし p=0.919					

表5 「学習意欲」×「家庭の経済階層」×「高2時校内成績」

分析対象は専門学科の生徒 Q9A×Q56×Q11B

高2時 校内成績	家庭の 経済階層	学習意欲		合計	N
		あてはまる	あてはまらない		
上位	上位 (%)	76.6	23.4	100.0	(107)
	中位 (%)	73.2	26.8	100.0	(127)
	下位 (%)	75.9	24.1	100.0	(145)
	合計 (%)	75.2	24.8	100.0	(379)
ガンマ係数：0.006 有意差なし p=0.812					
中位	上位 (%)	65.5	34.5	100.0	(206)
	中位 (%)	59.6	40.4	100.0	(228)
	下位 (%)	62.1	37.9	100.0	(261)
	合計 (%)	62.3	37.7	100.0	(695)
ガンマ係数：0.042 有意差なし p=0.448					
下位	上位 (%)	41.5	58.5	100.0	(236)
	中位 (%)	37.2	62.8	100.0	(317)
	下位 (%)	45.6	54.4	100.0	(349)
	合計 (%)	41.6	58.4	100.0	(902)
ガンマ係数：-0.072 10%水準で有意 p=0.093					

な数値としては、階層上位で学習意欲の高い者は85.0%、階層中位では60.6%、階層下位では71.4%となっており、学習意欲がもっとも高い階層上位と、もっとも低い階層中位の間には24.4ポイントの差がある。これは成績上位かつ階層上位の生徒がもっとも意欲高く学習に取り組んでいることを示す結果であり、これまでの先行研究が明らかにしてきた階層による意欲格差の実態と一致する。ただし全体の傾向としては階層というよりもむしろ、成績が高いほど学習意欲が高くなる傾向が確認され、成績による学習意欲の二極化がうかがえるという点は指摘しておく必要があるだろう。

次に専門学科を対象としたのが表5のクロス表である。専門学科では成績下位においてのみ経済階層と学習意欲の関連が確認された。成績下位において階層上位で学習意欲の高い者は41.5%、階層中位で学習意欲の高い者は37.2%、階層下位で学習意欲の高い者は45.6%となっており、階層下位においても学習意欲がもっとも加熱される傾向が明らかになった。また普通科と同様、全体の傾向として成績が高くなるほど、学習意欲も高くなる傾向が明らかになったが、学習意欲の分散は普通科に比べて小さくなっている。以上、成

績を統制しても両学科において経済階層が高いほど、学習意欲が高くなる傾向は確認されなかった。よって仮説3は棄却された。ただし、特定の成績層においては依然、階層が影響していることが明らかになり、普通科においては成績上位において、また専門学科においては成績下位において学習意欲が加熱される傾向が確認された。

4.3 高校卒業後の進路希望と 家庭の経済階層

仮説4：学科によらず、経済階層が高いほど、大学進学を希望する比率が高く、就職を希望する比率が低い。

仮説5：専門学科においては、成績によらず、経済階層が高いほど、大学進学を希望する比率が高く、就職を希望する比率が低い。

最後に進路希望と経済階層の関係をみる。表6は独立変数に家庭の経済階層を、従属変数に卒業後の進路希望を、統制変数に学科をとったクロス表である。ここでは大学進学希望と就職希望の比率に着目し分析結果をみていく。

まず専門学科においてであるが、階層上位で、四大・短大への進学希望者が31.5%、就

表6 「卒業後進路希望」×「家庭の経済階層」×「学科」

		卒業後進路希望				Q46 × Q56 × Q1B	
学科 (2分類)	家庭の 経済階層	卒業後進路希望				合計	N
		四大・短大	専門学校	就職	まだ決まっていない		
専門学科	上位 (%)	31.5	18.7	30.7	19.1	100.0	(524)
	中位 (%)	22.7	16.4	46.1	14.8	100.0	(640)
	下位 (%)	18.3	14.9	51.9	14.9	100.0	(726)
	合計 (%)	23.4	16.5	44.1	16.0	100.0	(1,890)
		ガンマ係数：0.120				0.1%水準で有意 p=0.000	
普通科	上位 (%)	51.5	22.4	9.1	17.0	100.0	(165)
	中位 (%)	53.8	21.9	8.3	16.0	100.0	(169)
	下位 (%)	44.0	27.6	12.7	15.7	100.0	(134)
	合計 (%)	50.2	23.7	9.8	16.2	100.0	(468)
		ガンマ係数：0.053				有意差なし p=0.618	

職希望者が30.7%、階層中位では四大・短大進学希望者が22.7%、就職希望者は46.1%となっている。そして階層下位であるが、四大・短大進学希望者は18.3%にとどまり、その一方で就職希望者は51.9%ともっとも比率が高くなっている。四大・短大希望は階層上位と下位層の間で13.2ポイント、就職希望は21.2ポイントの差があり、これらの差は0.1%水準で有意である。

次に普通科をみる。階層上位において四大・短大への進学希望者は51.5%、就職希望者は9.1%、階層中位では、四大・短大進学希望者は53.8%、就職希望者は8.3%、そして階層下位では四大・短大進学希望者が44.0%、就職希望者は12.7%となっている。

以上、表6から、専門学科では進路希望に階層が反映されるのに対し、普通科ではその傾向が確認されなかった。よって、仮説4についても専門学科においてのみ支持された。

しかしながら、進路希望を規定する要因は

家庭の経済階層1つではない。そこで上記の分析にさらに成績を加えたクロス表を作成した。それが表7である。なお、ここでの分析対象は専門学科の生徒に限定している。

分析の結果、すべての成績層において有意差が確認された。成績上位で、かつ階層上位の者の四大・短大希望の比率が38.1%、専門学校希望が15.2%、就職希望が28.6%となっている一方、階層下位では、成績上位であるにもかかわらず、四大・短大希望の比率はわずか23.8%にとどまっており、就職希望は51.7%となっている。次に成績中位であるが、階層上位で四大・短大希望の比率が35.4%、専門学校希望が18.5%、就職希望が30.3%であるのに対し、階層下位では四大・短大希望は17.0%、専門学校希望13.0%、就職希望53.4%となっている。最後に成績下位であるが、階層上位で四大・短大希望の比率が25.5%、専門学校希望が20.5%、就職希望が32.7%であるのに対し、階層下位では四大・

表7 「卒業後進路希望」×「家庭の経済階層」×「高2時校内成績」

		卒業後進路希望				合計	N
高2時 校内成績	家庭の 経済階層	四大・短大	専門学校	就職	まだ決まっていない		
分析対象は専門学科の生徒 Q46×Q56×Q11B							
上位	上位 (%)	38.1	15.2	28.6	18.1	100.0	(105)
	中位 (%)	35.0	13.3	44.2	7.5	100.0	(120)
	下位 (%)	23.8	12.6	51.7	11.9	100.0	(143)
	合計 (%)	31.5	13.6	42.7	12.2	100.0	(368)
ガンマ係数：0.135						1%水準で有意	p=0.007
中位	上位 (%)	35.4	18.5	30.3	15.9	100.0	(195)
	中位 (%)	22.5	15.9	49.3	12.3	100.0	(227)
	下位 (%)	17.0	13.0	53.4	16.6	100.0	(253)
	合計 (%)	24.1	15.6	45.3	15.0	100.0	(675)
ガンマ係数：0.211						0.1%水準で有意	p=0.000
下位	上位 (%)	25.5	20.5	32.7	21.4	100.0	(220)
	中位 (%)	18.0	18.3	43.6	20.1	100.0	(289)
	下位 (%)	17.2	17.6	50.5	14.7	100.0	(319)
	合計 (%)	19.7	18.6	43.4	18.4	100.0	(828)
ガンマ係数：0.045						1%水準で有意	p=0.004

短大希望は17.2%、専門学校希望17.6%、就職希望50.5%となっている。

以上の結果から同レベルの成績層であっても階層によって進路希望に大きな違いがあることが確認された。よって仮説5は支持された。

5 結論と考察

最後に今回の分析結果をまとめる(表8)。得られた知見は以下の3点である。

第1に、専門学科においては、家庭の経済階層が高いほど、中2時点の成績や中3時点の高校教育に対するレリバンス意識が高くなることが明らかになった。一方、普通科においては、家庭の経済階層による成績やレリバンス意識の差は確認されなかった。

第2に、普通科では階層上位において学習意欲が加熱されるのに対し、専門学科では階層下位において学習意欲が加熱される傾向が確認された。なおこの傾向は現在(高2時点)の校内成績を統制しても変化しなかった。

第3に、専門学科においては同レベルの成績層であっても、家庭の経済階層によって進路希望に違いがあることが明らかになった。専門学科の生徒は家庭の経済階層によって進路選択が制約されている可能性がある。

以上、これらの知見を踏まえ、最後に家庭の経済階層が生徒の学習意欲・進路選択に与える影響について若干の考察を行う。

まず学習意欲に関しては、専門学科において成績下位に限り、階層下位で学習意欲が加

熱される傾向が確認された。この背景にある要因として、学習意欲が進学ではなく就職によって高められていることなどが考えられるが、今後さらに生徒個人レベルの意識や動機づけを詳細に分析していくことで、普通科の成績下位や階層下位における生徒の学習意欲の加熱に応用していくことができるのではないかと。そしてこの点において階層による意欲格差の緩和に貢献できる可能性がある。

次に進路選択に関してであるが、専門学科において、家庭の経済階層の影響が維持されていることが明らかになった。同レベルの成績層であっても家庭の経済階層によって生徒の進路希望先に違いがあるという結果は、専門学科の生徒の中には「希望しない」のではなく、「希望できない」からやむを得ず他の進路を選択している生徒が少なからず存在していることを示している。近年、都立専門高校では高校入学前の成績や将来の進路希望に基づいた高校の再編が推し進められ、保護者・生徒のニーズに即した教育が目指されているが、基準となっている高校入学前の成績や将来の進路希望自体に階層による制約が存在していることは等閑視されているのではないかと。生徒や保護者のニーズに真の意味で応えようとするのであれば、高校の再編と同時に、奨学金制度など経済面でのサポートを今後さらに充実させ、階層による進路の固定化が起らないような教育環境を整備していく必要があるのではないかと。

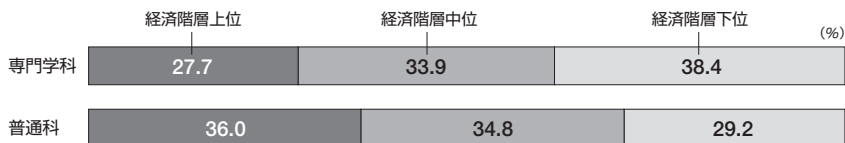
表8 知見のまとめ

	高校入学前の学力・レリバンス意識	現在の学習意欲	卒業後の進路希望
専門学科	学力との相関あり ⇒入学してくる生徒の階層による学力や意識の差が大きい傾向あり	家庭の経済階層下位で意欲加熱	同レベルの成績でも階層によって進路希望に差 ⇒成績が高くても経済的理由から大学に進学しない生徒が少なからず存在している可能性大
普通科	学力との相関なし	家庭の経済階層上位で意欲加熱	階層によって進路希望に差はほぼなし

〈注〉

- 1 成績上位かつ大学進学希望者の多い学校を「将来のスペシャリスト育成型」、就職希望でかつ進路が明確な生徒の多い学校を「専門能力育成型」、進路が不明確で成績下位の生徒が多い学校を「職業観育成型」に分類し、それぞれの学校タイプに即した教育活動と指導を提供することで生徒や保護者、産業界のニーズへの対応を目指すというものである（東京都教育委員会 2002a）。
- 2 参考までに今回のサンプルについて、学科（2分類）と家庭の経済階層（3分類）のクロス表を作成したものが以下の図である。

学科（2分類）と家庭の経済階層（3分類）のクロス表



注) 全体的な傾向としては普通科においてやや階層上位・中位層が多く、専門学科において階層下位が多い。

〈引用文献〉

- 荒牧草平、2002、「現代高校生の学習意欲と進路希望の形成」『教育社会学研究』71:5-22.
- 飯田浩之、2007、「中等教育の格差に挑む——高等学校の学校格差をめぐって」『教育社会学研究』80:41-60.
- 荻谷剛彦、2001、『階層化日本と教育危機——不平等再生産から意欲格差社会へ』有信堂高文社.
- 荻谷剛彦・志水宏吉編、2004、『学力の社会学——調査が示す学力の変化と学習の課題』岩波書店.
- 耳塚寛明・金子真理子・諸田裕子・山田哲也、2002、「先鋭化する学力の二極分化 学力の階層差をいかに小さくするか」『論座』11月号、212-27.
- 東京都教育委員会、2002a、『専門高校検討委員会報告書』
(<http://www.kyoiku.metro.tokyo.jp/buka/gakumu/senmon.htm>, 2009.8.27).
- 東京都教育委員会、2002b、「都立高校改革推進計画・新たな実施計画の策定について」
(<http://www.kyoiku.metro.tokyo.jp/press/pr021024k.htm>, 2009.10.16).